

須木村文化財調査報告書 第1集

おお とし だに
大 年 谷 遺 跡

1992.3

宮崎県須木村教育委員会

須木村文化財調査報告書 第1集

おお とし だに
大 年 谷 遺 跡

1992.3

宮崎県須木村教育委員会

序

須木村教育委員会では須木村の依頼を受け、「21世紀長寿村づくり事業」総合福祉センター建設に伴い、大年谷遺跡の発掘調査を行いました。

調査では、縄文時代早期の集石遺構、古墳時代の竪穴住居跡等が検出されましたが、これらは須木村内では初めての時期の調査として大きな成果を上げたところでございます。

このような調査の成果をまとめた本報告書が学術資料として、また、学校教育や社会教育の面で活用され、郷土に対する理解の一助になることを期待いたします。

なお、調査に際しまして調査員の派遣とともに種々ご指導をいただいた宮崎県教育委員会をはじめ、寒い中発掘作業にご協力をいただいた方々に厚く感謝申し上げます。

平成4年3月

須木村教育委員会
教育長 西 道 三 男

例 言

- 1 本報告は、須木村が「21世紀長寿村づくり事業」として建設する総合福祉センターの建設予定地内に所在する大年谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、須木村の依頼により平成3年1月11日から2月14日まで須木村教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査組織は次のとおりである。

調査主体 須木村教育委員会

教 育 長 西道 三男

教育総務課長 岩下 武史

生涯教育課長 山元 博司

〃 主査 椎屋 芳樹

(調査員)

宮崎県教育庁文化課

埋蔵文化財係長 岩永 哲夫

〃 主事 吉本 正典

- 4 本報告の執筆・編集は岩永哲夫が行い、石器の石材については宍戸章氏（宍戸地質研究所）の助言をいただいた。
- 5 出土品は須木村教育委員会で保管している。

本文目次

1	遺跡の位置と調査に至る経緯	1
2	調査の概要	2
3	縄文時代	2
(1)	遺構	5
(2)	遺物	7
4	古墳時代	15
(1)	遺構	15
(2)	遺物	16
5	まとめ	17

挿図目次

第1図	大年谷遺跡位置図	1
第2図	発掘区周辺地形図	3
第3図	縄文時代早期遺構遺物分布図	4
第4図	1号集石遺構実測図	5
第5図	2号集石遺構実測図	5
第6図	3号集石遺構実測図	6
第7図	4号集石遺構実測図	6
第8図	4号礫群実測図	6
第9図	縄文土器実測図(1)	8
第10図	縄文土器実測図(2)	9
第11図	石器実測図(1)	12
第12図	石器実測図(2)(石鏃)	12

第13図	石器実測図（3）	13
第14図	1号竪穴住居跡実測図	15
第15図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図	16

表 目 次

第1表	縄文早期出土土器観察表	10
第2表	縄文早期ほか出土石器計測表	14
第3表	1号竪穴住居跡出土土器・石器観察計測表	17

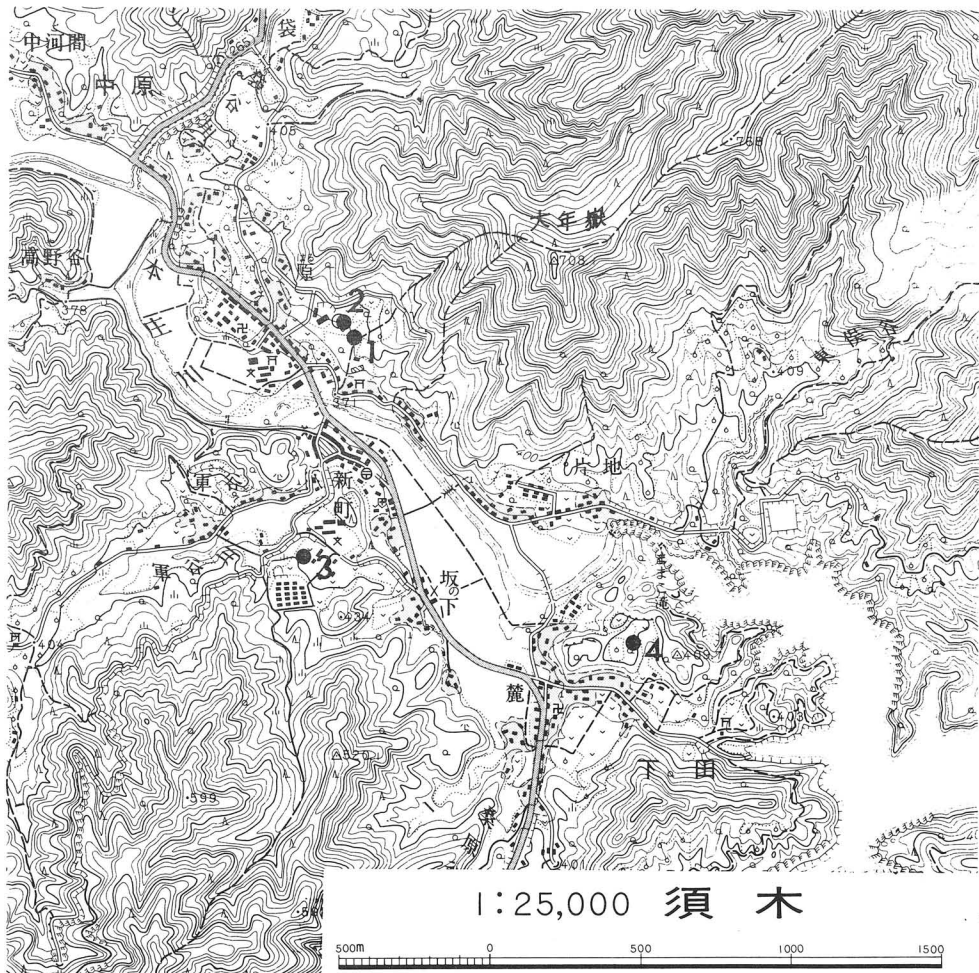
図 版 目 次

図版1	遺跡遠景・発掘風景
図版2	礫群発掘風景・1号集石遺構
図版3	2号集石遺構・3号集石遺構
図版4	4号集石遺構（検出状況、中の礫を除去した状態）
図版5	3号礫群検出状況・3号礫群内紡錘車様石器出土状態
図版6	1号竪穴住居跡
図版7	1号竪穴住居跡内土器出土状況（鉢形土器）
図版8	縄文土器
図版9	石 器
図版10	石 器
図版11	1号竪穴住居跡出土遺物

1 遺跡の位置と調査に至る経緯

大年谷遺跡は、西諸県郡須木村大字下田1,151に所在する（第1図）。

須木村の中心部を北西から南東に流れる本庄川の左岸にあり、大年嶽の南西に降りる斜面が緩斜面に移行した標高約400mの地点にあり、遺跡の中心は南に延びる小さい尾根上に広がっている。小谷を挟んだ北西隣には県指定須木村古墳が所在している。



第1図 大年谷遺跡位置図 (1. 大年谷遺跡 2. 上ノ原地下式横穴墓群)
(3. 尾殿遺跡 4. 須木城跡)

県指定須木村古墳は地下式横穴墓（地下式古墳）4墓を内容としており、昭和9年4月17日に指定されている。

県指定須木村古墳を含む一帯は、地下式横穴墓が群集しており、昭和55年の須木村役場建設工事の際、10基発見され、県教育委員会によって発掘調査が行われている（註1）。

須木村では平成2年度「21世紀長寿村づくり事業」として総合福祉センター建設が計画されたが、建設予定地は地形的にも埋蔵文化財の所在が予測されたため村教育委員会で試掘調査を実施し、遺跡の所在の有無について確認することになった。

試掘調査は県教育委員会の協力を得て、文化課主任主事北郷泰道を調査担当者として平成2年9月26、27日の2日間実施した。2×3mのトレンチを6箇所入れた結果、アカホヤ層上から土師器片、須恵器片、アカホヤ層下から黒曜石、石鏃等が出土した。以上のことから予定地は狭い丘陵ながら縄文時代早期および古墳時代から古代にかけての遺跡と考えられ、工事着工前の発掘調査が必要となったものである。

2 調査の概要

発掘調査は須木村の依頼を受けて村教育委員会が実施することになったが、村教育委員会に専門職員がいないことから県教育委員会に職員派遣を申請し、文化課埋蔵文化財係長岩永哲夫、同主事吉本正典を調査担当者として実施した。

現地は調査対象の範囲を残して造成工事が進められていた。調査は対象地の上方を1区、下方を2区とし、重機による表土剥ぎから始め、その後、遺構精査を進めた。

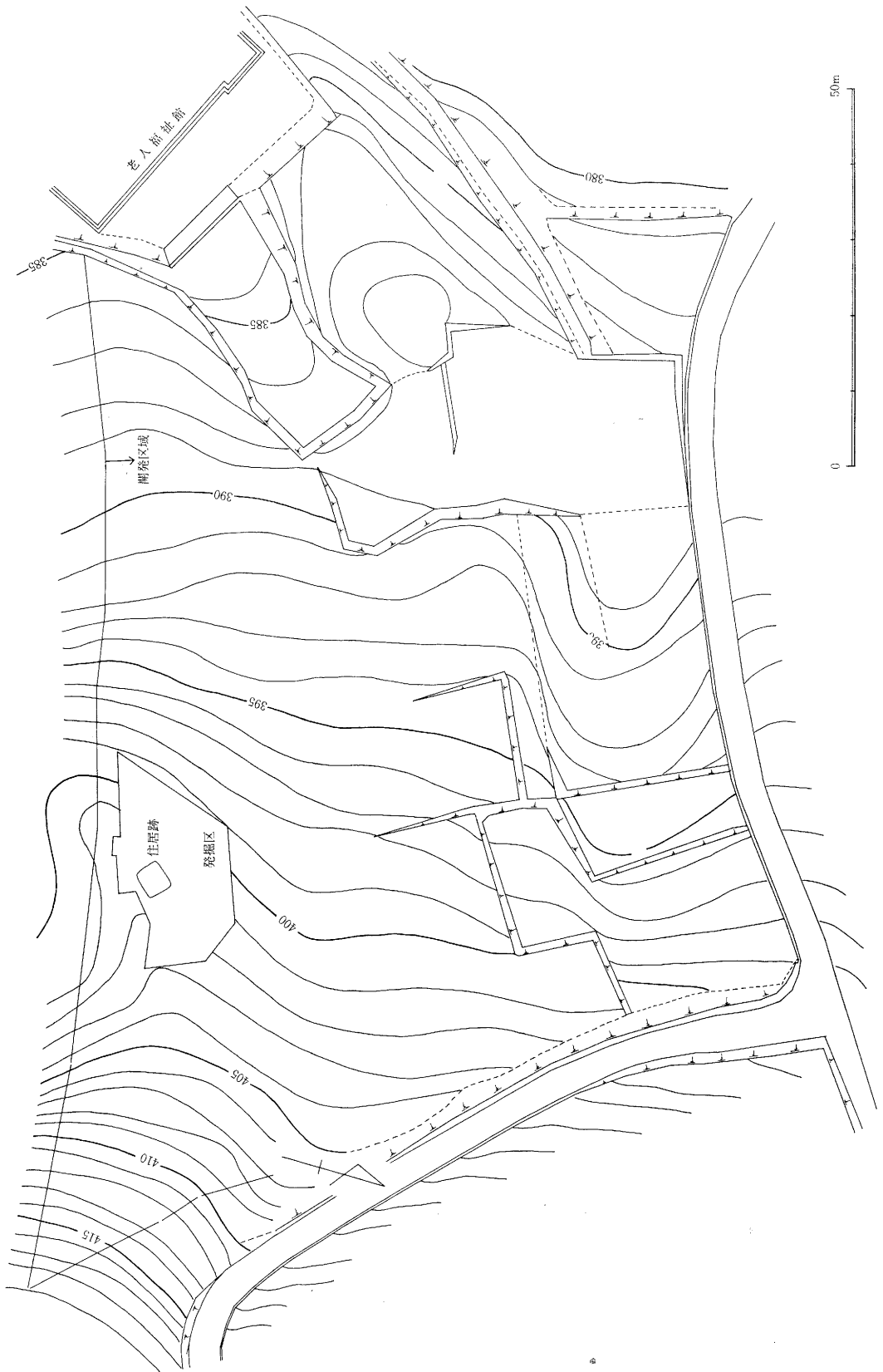
1区についてはアカホヤ層にまで掘り込む形でつくられた竪穴住居跡を1軒、アカホヤ層下からは集石遺構等の礫群や土器片等を検出することができたが、2区については表土中から土師器片や石庖丁を採集したものの遺構等の存在は確認できなかったため、調査は1区を中心に進めた。1区の調査面積は約310㎡である。

以下、1区の調査結果について報告する。

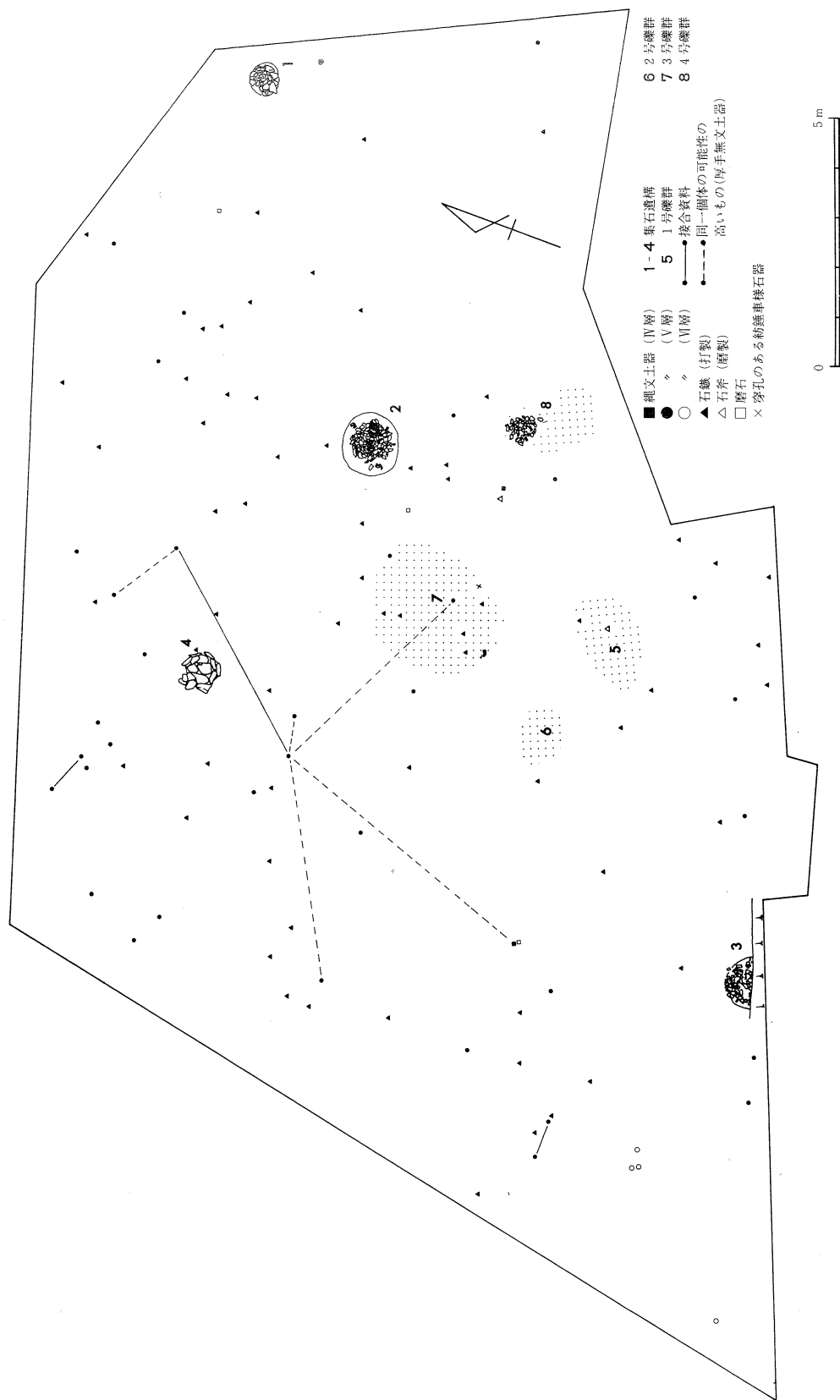
3 縄文時代

1区の基本層序は、第Ⅰ層（表土）、第Ⅱ層（黒色土層）、第Ⅲ層（アカホヤ層）、第Ⅳ層（黒褐色土層）、第Ⅴ層（暗褐色土層）、第Ⅵ層（黄褐色土層）である。

アカホヤ層（第Ⅲ層）下から縄文時代早期の遺構、遺物が検出された。



第2图 尧墟区周边地形图



第3図 縄文時代早期遺構遺物分布図

(1) 遺構

集石遺構4基および礫群4箇所を検出することができた(第3図)。

1号集石遺構(第4図)

調査区の北東端から検出されたもので、第V層の暗褐色土層中に構築されている。

60×70cmのやや明瞭な円形状掘り込みに充填された状態で出土し、25cm程度の大き目の角礫も含まれている。角礫は焼けている。埋土中には炭化物が多く含まれ、床面には扁平な石を敷いている。遺構中から土器等は出土していない。

2号集石遺構(第5図)

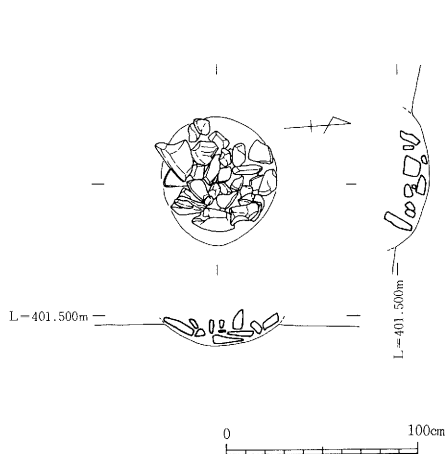
第IV層と第V層の境界付近に構築されている。

110×130cmの浅い円形状掘り込みの中に10~20cm程度の小角礫を充填したものであり、礫は赤く焼けている。土器等は出土していない。

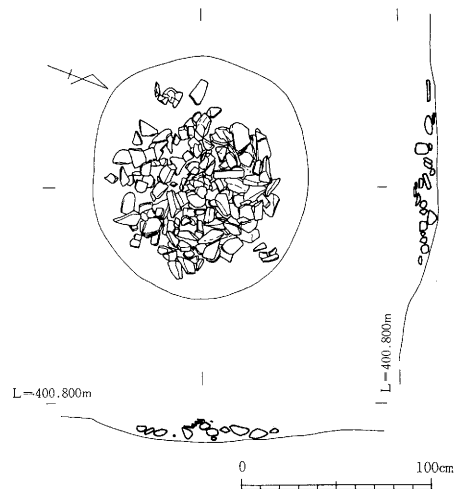
3号集石遺構(第6図)

3号は第V層に構築しており、上端面から40cm程の深い掘り込みを持っている。形状は110cm程の円形状をしている。礫は10cm程度の小ぶりの角礫が殆どで、掘り込みの中位から下位にかけては埋土が灰色味を増し、炭化物を含んでいる。また、最下部には屑礫が多く、同じく炭化物を含んでいる。礫は焼けている。土器等は出土していない。

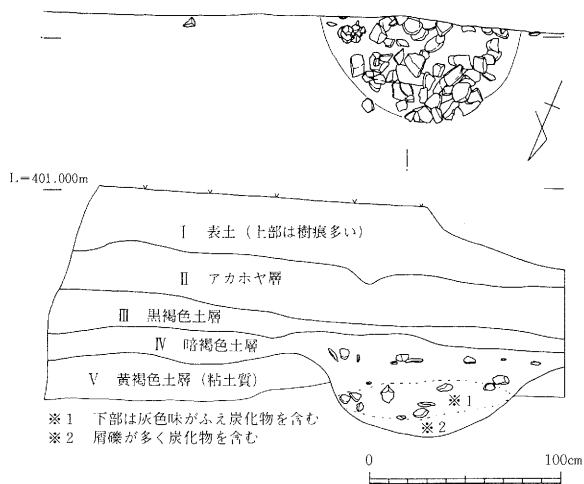
4号集石遺構(第7図)



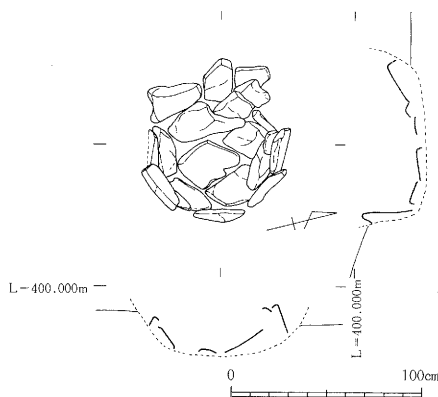
第4図 1号集石遺構実測図



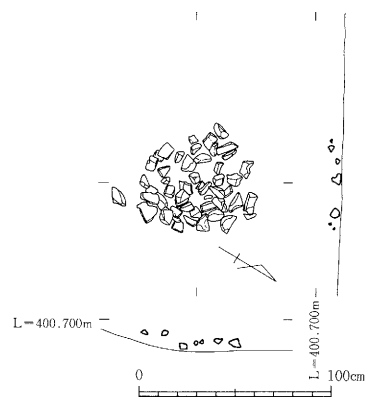
第5図 2号集石遺構実測図



第6図 3号集石遺構実測図



第7図 4号集石遺構実測図



第8図 4号礫群実測図

調査区の北側斜面の第IV層から第VI層にかけて構築しているが、他の集石遺構とは様相を異にする。

80×90cmの円形状掘り込みの中に、30～40cm程もある大き目の焼けた扁平礫を詰め込んだ状態で検出され、中の礫を取り除くと、正に組石と言うにふさわしく扁平礫を敷き周りには同様な礫を立てかけた状態であった。組石の内面は焼けているが、土器や炭化物は認められなかった。

この集石遺構は将来の展示を考えて切取り保存したため床面は未確認である。

礫 群 (第3図・第8図)

散漫な焼礫は調査区全体にみられたが、礫群といわれるものは以上の集石遺構のほかに4箇所認められた。

これらの礫群には規格のようなものはなく、通常、廃棄礫と考えられるものであるが、土壌中には炭化物も含んでいる。また、土器等の遺物も散見できる。

(2) 遺 物

遺物は土器・石器で、発掘区の平面分布状況は第3図のように特には集中するような傾向はみられず、万遍なく検出されている。

縄文土器 (第9図、第10図、第1表)

土器の出土状況について少し細かくみると、層位的には第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層が包含層になっており、殆どは第Ⅴ層出土である。

第Ⅳ層からは以下にいう2類(16)、5類(30)が、第Ⅴ層からは1類(1～7)、2類(9～11、13～15、17、18)、3類(20、21)、4類(22)、5類(23～25、28、29、31、32、34、35)が、第Ⅵ層からは1類(8)、3類(19)、5類(33)が出土している。

このような状況をみる限り、各類を層位によって前後関係を把握することは困難である。縄文土器は大きく次の5類に分けられる。

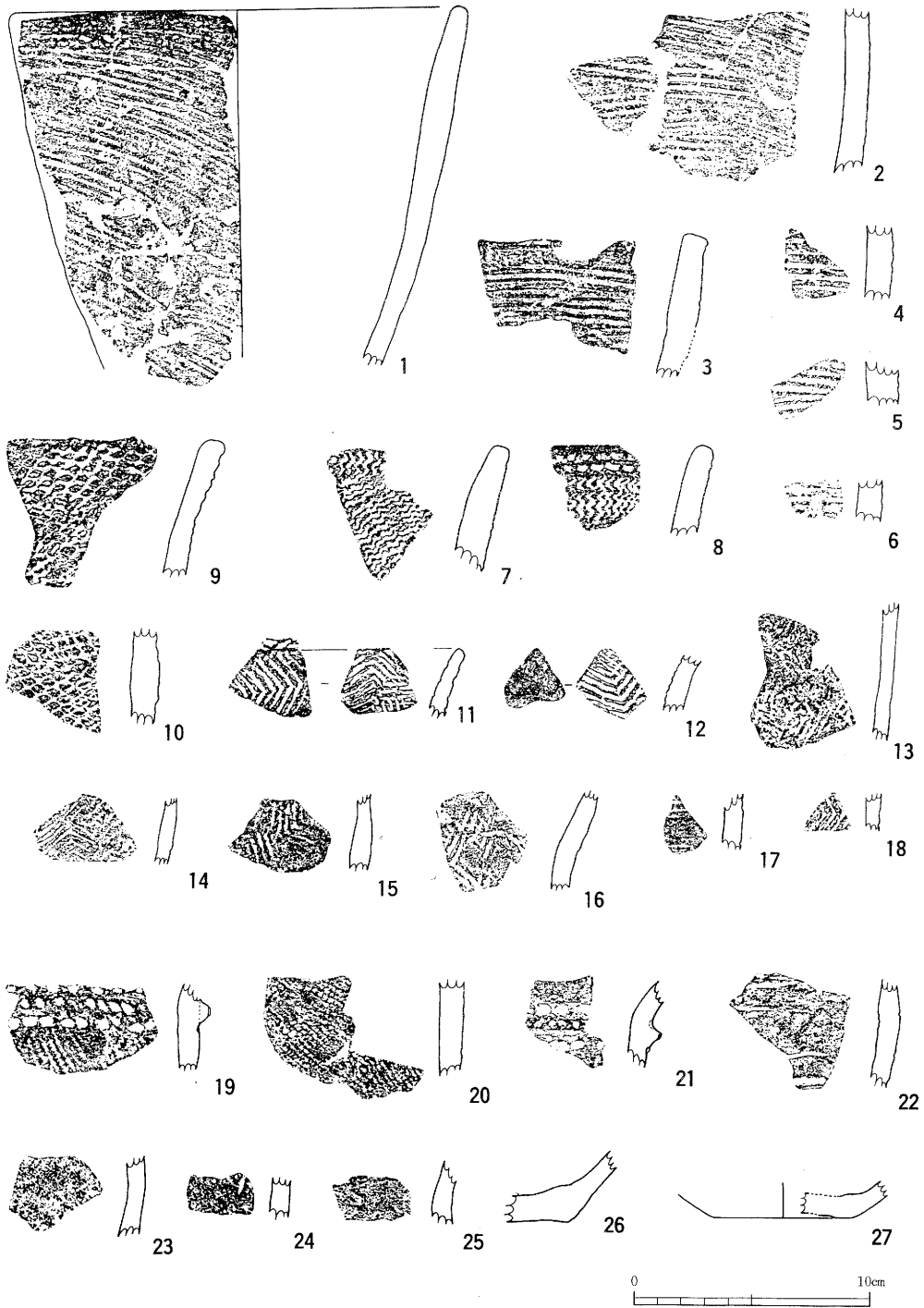
- 1類 貝殻文施文円筒形土器
- 2類 押型文土器
- 3類 縄文施文土器
- 4類 条痕文土器
- 5類 無文土器

1類土器は、南九州を中心に分布する貝殻文施文円筒形土器で、a、bに細分できる。

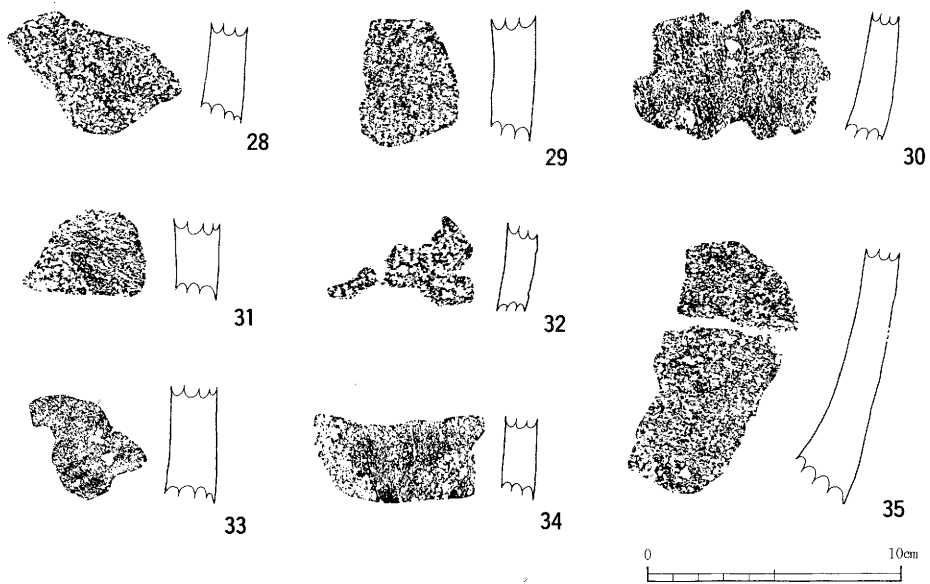
1-a類は前平式といわれるものである(1～6)。1-b類は施文部位認識は1-a類に共通しているが、一見、押型文に見えるほど原体を連続施突するなどその使用法を異にしている(7、8)。

2類土器は押型文土器で、楕円文を施文した2-a類(9、10)と粗大な山形文を施文した2-b類(11～18)に分けられる。2-b類は手向山式であろう。

3類土器は、基本的に地文に縄文を施したもので(19～21)、平椀式に近いものであるが、若干趣を異にするものがあり、今後、検討していきたい。



第9図 縄文土器実測図(1) (縮尺 1/3)



第10図 縄文土器実測図(2) (縮尺 1/3)

4類土器は条痕文土器であるが(22)、小片のため詳細はわからない。

5類土器は無文土器で、薄手の5-a類(23~25)と厚手の5-b類(28~35)のものに分けられる。無文土器は1類から4類までのどの時期かに共伴するのではないかと考えている。

石器(第11~13図)

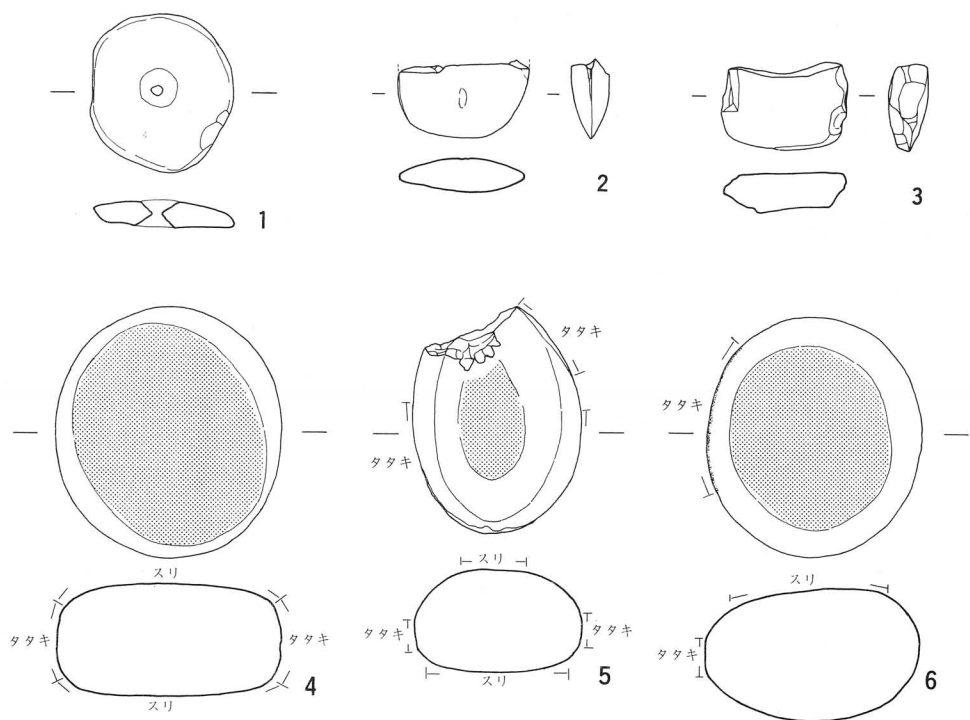
石斧片(磨製、半磨製)、磨石、敲石、石皿、凹み石、石鏃、紡錘車様石器、使用面のある礫等が出土している。特に、石鏃が著しく多量に出土し、総数99点、うち完形品34点、破損品50点、未製品等15点にもものぼっている。

また、時期は違うが、2区から両端抉りの石庖丁を表採している。

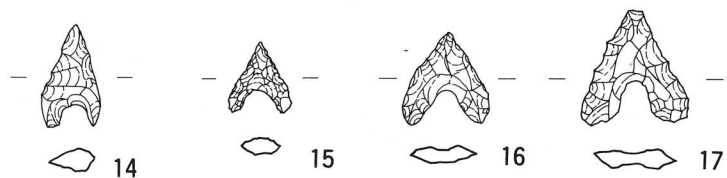
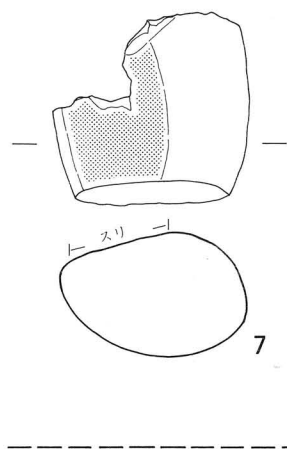
第1表 縄文早期出土土器観察表

番号	出土層位 取上げ番号	部位	調査面		胎土	色面		調内面		備考
			外	内		外	内	外	内	
1	V 104	口縁部 ～胴部	口縁部貝殻縁刺突以下貝殻条痕	ナデ (一部スラス付着)	1ミリ以下の黒色光沢粒、茶色粒、砂粒多量。2ミリ以下透明光沢粒。	淡黄 (2.5Y 8/4)	黄灰 (2.5Y 4/1)			
2	V 59	胴部	貝殻条痕	ナデ	1ミリ以下の透明光沢粒多量。	淡黄 (2.5Y 8/4)	黄灰 (2.5Y 5/1)			
3	V 60	口縁部	貝殻条痕 (スラス付着)	ナデ	1ミリ以下の透明光沢粒。 2ミリ以下の白色粒。	灰褐 (7.5YR4/2)	褐灰 (7.5YR5/1)			
4	V 57	胴部	貝殻条痕	ナデ	灰白の砂粒多量。	淡黄 (2.5Y 7/3)	黄灰 (2.5Y 4/1)			
5	V 39	胴部	貝殻条痕	ナデ	1ミリ以下の透明光沢粒多量。 2ミリ以下の砂粒。	黄灰 (2.5Y 5/1)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)			
6	V 59	胴部	貝殻条痕	ナデ	2ミリ以下の透明光沢粒多量。	淡黄 (2.5Y 8/3)	黄灰 (2.5Y 4/1)			
7	V 99	口縁部	貝殻連続刺突文 (スラス付着)	ナデ	0.5ミリ以下の透明光沢粒多量。 1.5ミリ以下の黒色光沢粒。 3ミリ以下の白色粒。	褐灰 (7.5YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR 7/3) 褐灰 (7.5YR4/2)			
8	VI 69	口縁部	貝殻連続刺突文	ナデ	1ミリ以下の透明粒多量。 2ミリ以下の白色粒。 3ミリ以下の黒色光沢粒。	淡黄 (2.5Y 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)			
9	V 65	口縁部	楕円押型文	ナデ	0.5ミリ以下の白色透明光沢粒多量。 2ミリ以下の黒色光沢粒。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)			
10	V 54	胴部	楕円押型文	ナデ	白色透明光沢細砂粒及び2ミリ以下の黒色光沢粒多量。	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR 6/4) 褐灰 (7.5YR4/1)			
11	V 37	口縁部	粗大山形押型文	粗大山形押型文	1ミリ以下の透明光沢粒。茶色の砂粒、白色細砂粒。	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)			口唇部にも施文 (手向山式)
12		胴部	粗大山形押型文	ナデ	白色透明光沢粒ほか細砂粒多量。 3ミリ以下の茶色粒。	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)			(手向山式)
13	V 99、44	胴部	粗大山形押型文	ナデ	白色透明光沢微細粒多量。	橙 (7.5YR7/6)	にぶい褐 (7.5YR5/3)			(手向山式)
14	V 34	胴部	粗大山形押型文	ナデ	白色、茶色透明光沢微細砂粒多量。	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)			(手向山式)
15	V 50	胴部	粗大山形押型文	ナデ	白色透明光沢微細砂粒多量。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR6/3)			(手向山式)
16	IV 81	胴部	粗大山形押型文	ナデ	1.5ミリ以下の透明光沢粒及び細砂粒多量。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR 7/6) 淡黄 (2.5Y 8/4)			(手向山式)
17	V 45	胴部	粗大山形押型文	ナデ	白色、茶色透明光沢微細砂粒多量。	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR5/4)			(手向山式)
18	V 32	胴部	粗大山形押型文	ナデ	白色、透明光沢微細砂粒多量。	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)			(手向山式)

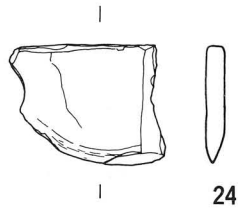
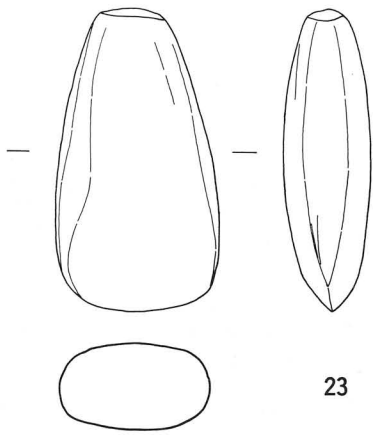
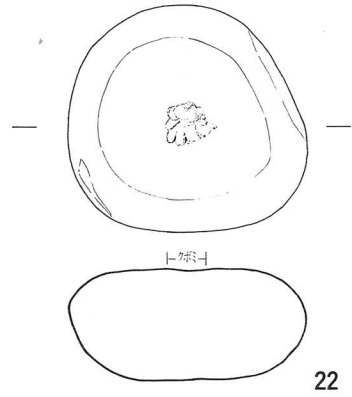
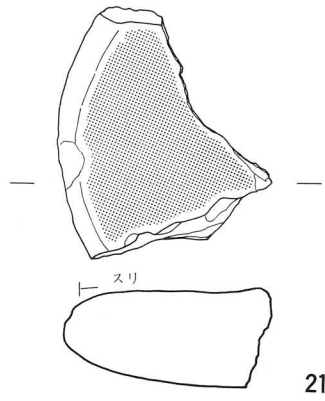
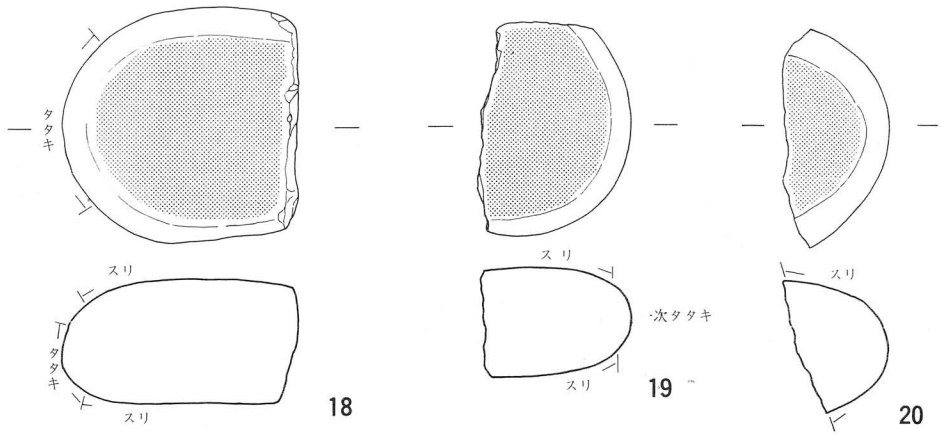
番号	出土層位 取上げ番号	部位	調整		文様	胎土	色面		備考
			外	内			外	内	
19	VI 67	胴部	縄文、突帯上刺突、刺突列点	ナ	ナ	3ミリ以下半透明粒、白色透明光沢細砂粒多量。3ミリ金色光沢粒。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (5YR 6/6)	
20	V 21	胴部	縄文	ナ	ナ	2ミリ以下透明光沢粒及び細砂粒多量。	橙 (5YR 7/6)	灰 褐 (5YR 5/2)	
21	V 90	胴部	突帯上刺突、刺突列点	ナ	ナ	2ミリ以下の茶色透明光沢粒、白色粒多量。	にぶい橙 (7.5YR6/4) にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	
22	V 26	胴部	条痕文	ナ	ナ	3ミリ以下の灰白粒、透明光沢細砂粒多量。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	
23	V 78	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	3ミリ以下の白・灰白粒多量。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	薄手無文、径 0.8cm
24	V 86	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	4ミリ以下の白色粒多量、透明光沢細砂粒。	橙 (7.5YR7/6)	褐 灰 (7.5YR4/1)	薄手無文、径 0.8cm
25	V 72	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	2ミリ以下の透明光沢粒及び白色等の細砂粒多量。	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR 6/6)	薄手無文、径 0.8cm
26	V 95	底部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	白色透明光沢粒等の細砂粒多量。	淡 黄 (2.5Y 8/4)	淡 黄 (2.5Y 8/4)	平底
27	V 35、36	底部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	1ミリ以下の透明光沢粒、乳白色粒多量。 4ミリ以下の茶色粒。	橙 (7.5YR7/6)	灰 褐 (7.5YR5/2)	平底、底径 6.0cm
28	V 39	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	1ミリ以下の透明光沢粒多量。 2ミリ以下の黒色光沢粒、白色粒。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰 黄 褐 (10YR 5/2) 灰 褐 (10YR 4/1)	厚手無文、径 1.5cm
29	V 29	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	2ミリ以下の白色・黒色光沢粒多量。 4ミリ以下白色粒。	浅 黄 橙 (10YR 8/4)	黒 褐 (10YR 3/1)	厚手無文、径 1.7cm
30	IV 74	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	2ミリ以下黒色光沢粒、透明光沢粒多量。 2ミリ以下の茶・褐色砂粒。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰 褐 (7.5YR4/2)	厚手無文、 径 1.2～1.5cm
31	V 84	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	2ミリ以下の透明光沢粒多量。 4ミリ以下の白色粒。	浅 黄 橙 (10YR 8/4)	黒 褐 (10YR 3/1)	厚手無文、径 1.7cm
32	V 99	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	2ミリ以下の透明光沢粒多量。 6ミリ、3ミリ大粒。	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅 黄 橙 (10YR 8/4) 灰 黄 褐 (10YR 6/2)	厚手無文、径 1.2cm
33	VI 68	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	2ミリ以下の白色・黒色光沢粒。 1ミリ以下の透明光沢粒多量。	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	褐 灰 (10YR 4/1)	厚手無文、 径 1.8～2.0cm
34	V 91	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	3ミリ以下白色粒。 2ミリ以下黒色光沢粒。 1ミリ以上透明光沢粒多量。	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐 灰 (7.5YR4/1)	厚手無文、径 1.3cm
35	V 43、49	胴部	無文 (ナデ)	ナ	ナ	3ミリ以下黒色光沢粒、白色粒。 2ミリ以下透明光沢粒多量。	橙 (7.5YR7/6)	灰 (10YR 4/1)	厚手無文、径 1.4cm



第11図 石器実測図(1)
(縮尺 1/3)



第12図 石器実測図(2) (石鏃) (縮尺 2/3)



第13図 石器実測図(3)(縮尺 1/3)

第2表 縄文早期ほか出土石器計測表

番号	取上げ番号	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	115	紡錘車様石器	6.4	5.8	1.1	58.0	細粒砂岩	中央に穿孔 第11図
2	116	磨製石斧	3.0	5.2	1.5	21.2+α	極細粒砂岩	先端部のみ残存 "
3	80	半磨製石斧	3.3	5.0	1.6	38.0+α	極細粒砂岩	先端部のみ残存 "
4	107	磨石	10.0	8.9	4.5	675.5	角内石輝石安山岩	敲石としても使用 "
5	106	磨石	9.0	6.6	4.1	360.0+α	細粒砂岩	一部欠損、敲石としても使用 "
6	105	磨石	9.6	8.5	5.3	631.3	細粒砂岩	敲石としても使用 "
7	4号礫群中	使用面のある礫	6.6	7.7	4.9	357.2+α	細粒砂岩	一部にスリの面あり "
8		石 鏃	1.3	1.3	0.1	0.3	黒曜石	第12図 "
9	47	石 鏃	1.3	1.2	0.2	0.3	黒曜石	"
10	17	石 鏃	1.7	1.3	0.3	0.4	チャート	"
11	112	石 鏃	1.7	1.5	0.4	0.6	頁岩	"
12	12	石 鏃	1.9	1.3	0.4	0.6	チャート	"
13	75	石 鏃	2.0	1.5	0.2	0.6	頁岩	"
14	114	石 鏃	2.1	1.2	0.5	0.8	黒曜石	"
15	48	石 鏃	1.4	1.2	0.3	0.3	チャート	"
16	8	石 鏃	1.8	1.3	0.3	0.9	チャート	"
17	15	石 鏃	2.3	2.2	0.4	1.5	チャート	"
18	—	磨石	9.3	9.3	5.0	751.0+α	中～細粒砂岩	半損、敲石として使用 第13図
19	—	磨石	8.5	6.0	4.4	362.0+α	溶結凝灰岩 (尾鈴山酸性岩類)	半損、一部にタタキあり "
20	—	磨石	8.6	4.1	5.1	202.5+α	溶結凝灰岩 (尾鈴山酸性岩類)	一部のみ残存 "
21	—	石 皿	9.7	8.4	3.9	361.5+α	細粒砂岩	一部のみ残存、片面使用 "
22	—	凹み石	9.5	8.9	4.4	558.0	中～細粒砂岩	中央に凹部あり "
23	表 採	磨製石斧	12.0	6.5	3.5	407.3	極細粒砂岩	完形 "
24	2区表土	石 庖丁	5.4	4.7	0.7	35.4+α	頁岩	半欠、挟り入り石庖丁 "

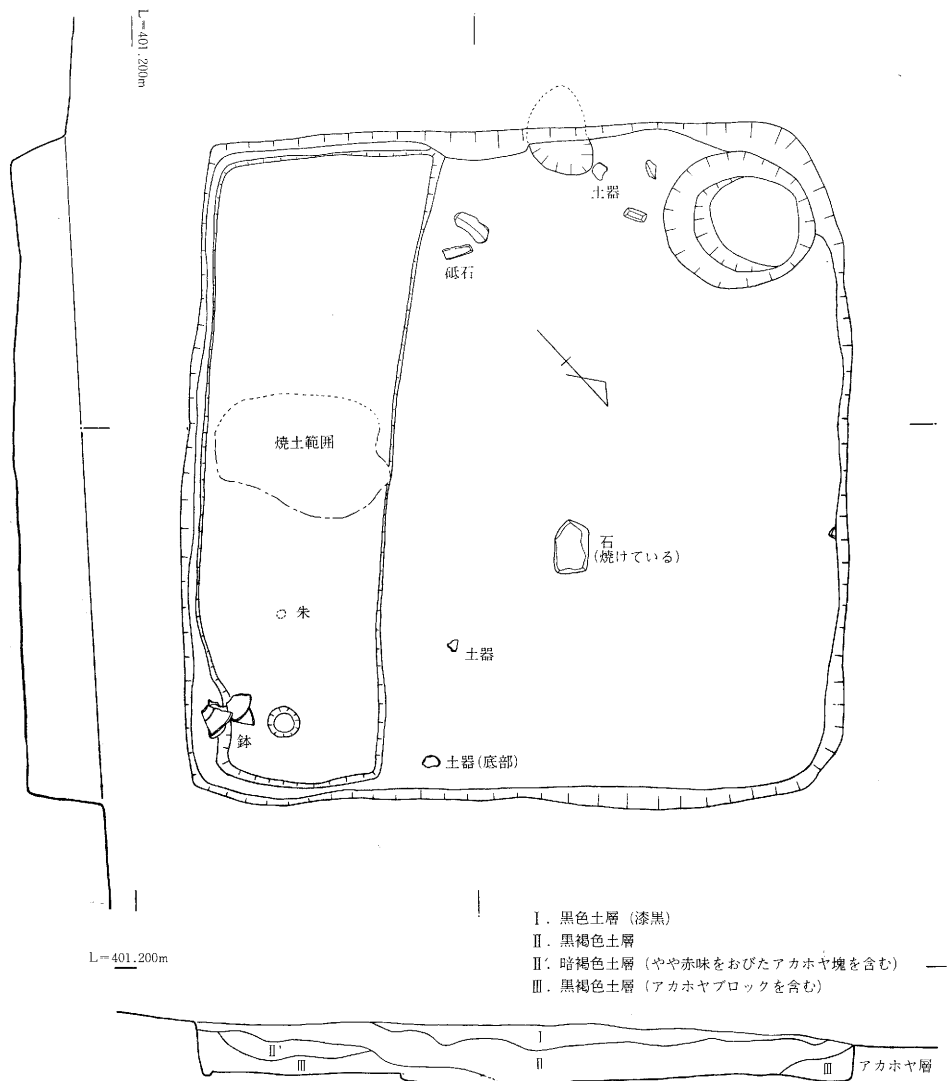
4 古墳時代

(1) 遺構 (第14図)

調査区のほぼ中央、南西方向に延びる尾根上に竪穴住居跡を1軒検出した。尾根上のため住居跡は平坦面に所在していることになる。

1辺 370 cm程の隅丸方形をなし、床面積は13.7㎡である。

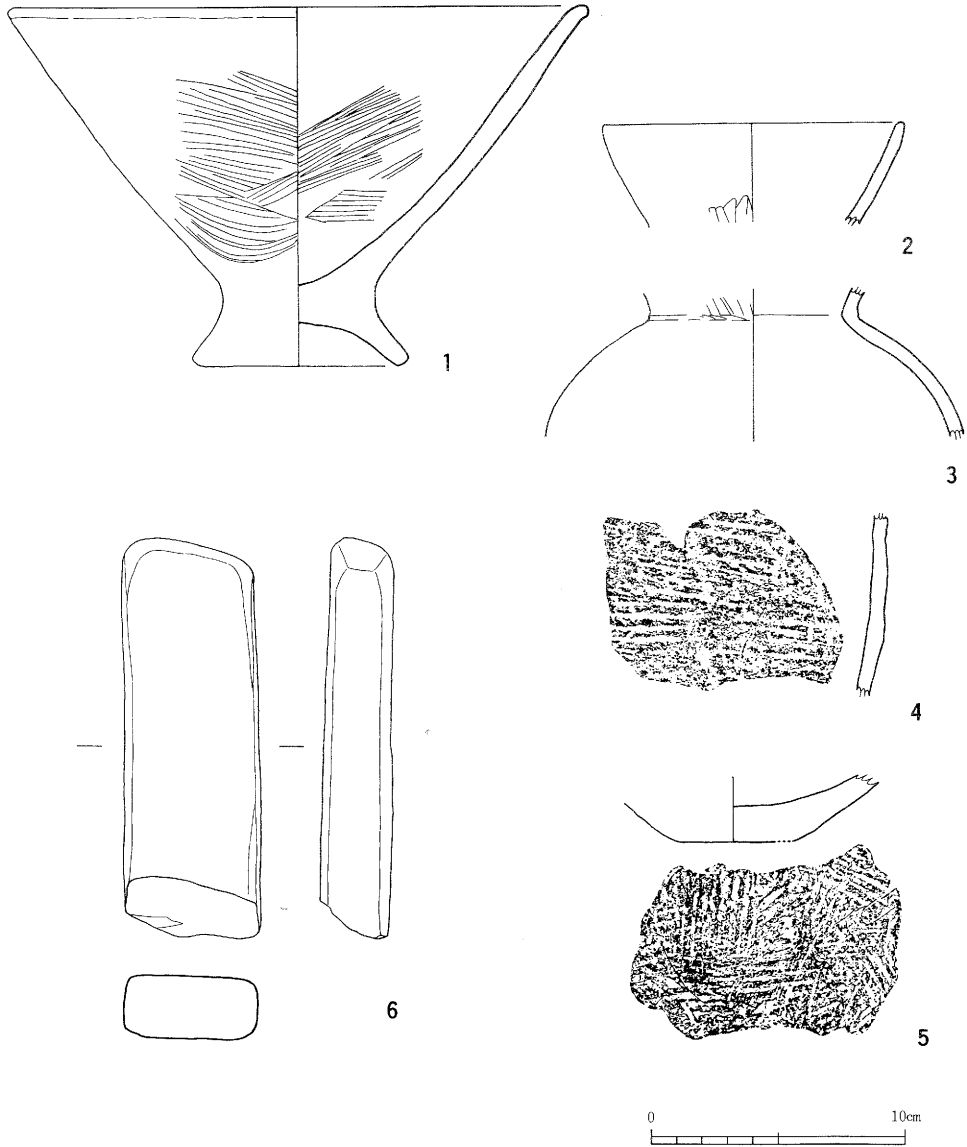
アカホヤ層中に掘り込んでおり、確認できる深さは中央付近で35cmである。南東側には造り出し風に100～110 cmの幅をもって1段高く床面を形成している。その1段高い床面の中央には焼土面が広がっており、壁面との間には約3 cm幅の小溝を巡らせている。柱穴は東隅に1個確認できただけである。西隅には径80cm深さ約80cmの穴がある。



第14図 1号竪穴住居跡実測図

(2) 遺物 (第15図)

遺物は東隅の柱穴に近い地点からほぼ完形の鉢形土器が1点出土したほか薄手の壺形土器、全面タタキのある胴部片と底部片、石器として砥石1点が出土している。



第15図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

第3表 1号竪穴住居跡出土土器・石器観察計測表

(土器)

番号	取上げ番号	器形部位	調整および文様		胎土	色調		備考
			外面	内面		外面	内面	
1	1	鉢形 半完形	ナデ	ナデ (黒色部分あり)	3ミ以下の白色粒、2ミ以下の透明光沢粒、1ミ以下の黒色光沢粒	明赤褐(2.5YR5/8) にぶい黄橙 (10YR 7/4)	赤褐(2.5YR 4/6) 橙 (7.5YR 7/6)	口径22.6cm 器高13.5cm 底径7.8cm
2		壺形 口縁部	ナデ、一部 ミガキ(著 しい風化)	ナデ	透明光沢微砂粒	浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙(10YR 8/4)	口径11.8cm
3	3ほか	壺形 頸~胸部	ミガキ(著 しい風化)	ナデ	透明光沢微砂粒	浅黄橙 (10YR 7.5YR 8/4)	灰 (5Y 5/1)	
4	4	胴部	ヨコ方向の タタキ (スス付着)	ケズリ	4ミ以下の砂粒多量	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	
5	2	底部	ヨコ、ナナ メ方向のタ タキ	ナデ	6ミ以下の砂粒多量 3ミ大の透明光沢粒	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	底径4.5cm No.4と同一 個体

(石器)

番号	取上げ番号	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
6	6	砥石	15.8	5.4	2.8	475.8 + α	細~極細粒砂岩	一部欠損 第15図

5 まとめ

これまで須木村において発掘調査の行われた遺跡は、大年谷遺跡をはじめ上ノ原地下式横穴墓群(地下式古墳群)、田代ヶ八重遺跡(註2)で数少ないが、ほかに確認調査として焼畑農耕史研究会の上床遺跡の調査(註3)がある。

いずれも近年の調査であるが、調査以外では、昭和49年、西諸県過疎地域教育センターの敷地内(尾殿遺跡)で完形の弥生土器が発見された。この土器は昭和49年11月1日、須木村指定有形文化財となり、大切に保管されている。

このような調査等により縄文時代早期・後期、弥生時代、古墳時代というように次第に須木村の歴史が明らかになり、紐解かれるようになってきた。

今回の大年谷遺跡の調査では縄文時代早期と古墳時代前葉の遺構・遺物を検出することができた。

縄文早期では、掘り込みのある4基の集石遺構を確認したが、4号集石遺構は他の3基

と様相を異にし、組石炉としても良いほど充実したものであった。県内でも珍しい1例である。他の集石遺構との関連等については類例を待ちながら検討していきたい。

また、特記される事項として、石鏃の多さをあげることができる。その石鏃は全体的に小型のものが多く、破損したものの量や黒曜石の夥しい剥片を合わせ考える時、石器製作所とともに活発な山岳狩猟をも想起させ、当時の須木ムラの活力を彷彿とさせるに十分な石鏃群であった。

古墳時代の住居跡は須木村では初見である。遺跡を村中央の麓から見上げる時、とても住居跡が所在するような感じは受けないが、僅かな尾根上の平坦地を利用して生活を営む事例を確認したことは、今後の須木村内の調査を進める場合大きな参考になるものと考えられる。

また、上ノ原地下式横穴墓群が極めて近距離にあり、その住居域ともみられたが、時期的には若干ずれるようであり、地下式横穴墓群を営んだ人々の住居域の所在については改めて同様な地形を考慮しながら今後注意しておく必要がある。

註1 宮崎県教育委員会「上ノ原地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』
第23集 1981

註2 宮崎県教育委員会「田代ヶ八重遺跡」 1992

註3 焼畑農耕史研究会「西諸県郡須木村上床遺跡の調査」『宮崎考古』第9号 1984



遺跡遠景



発掘風景



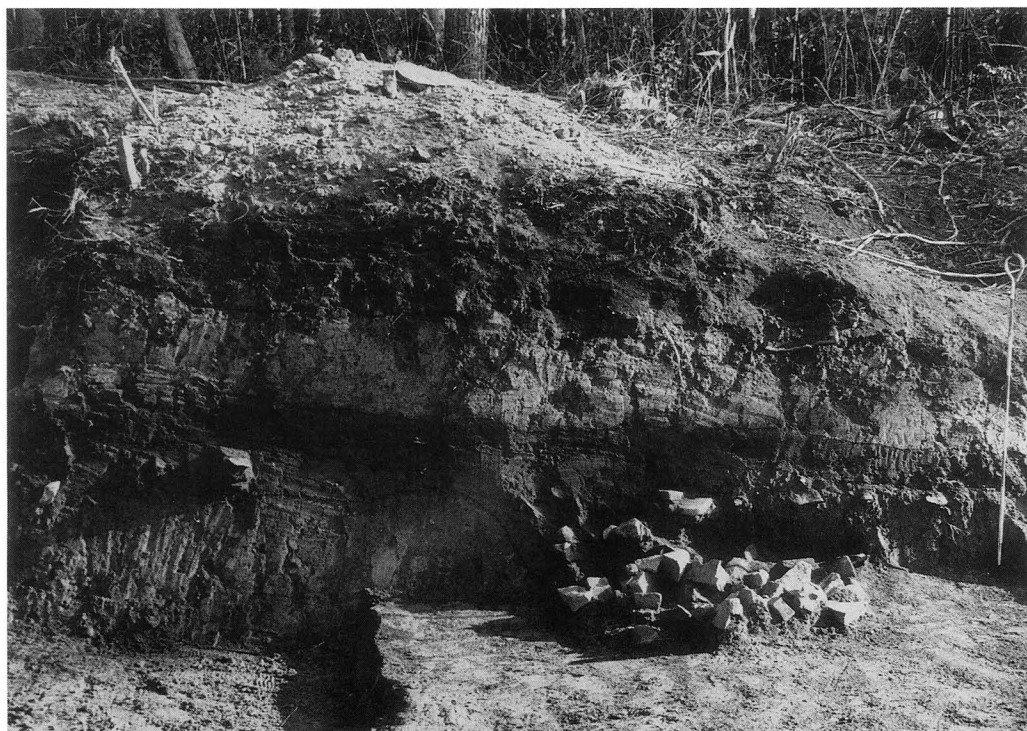
礫群発掘風景



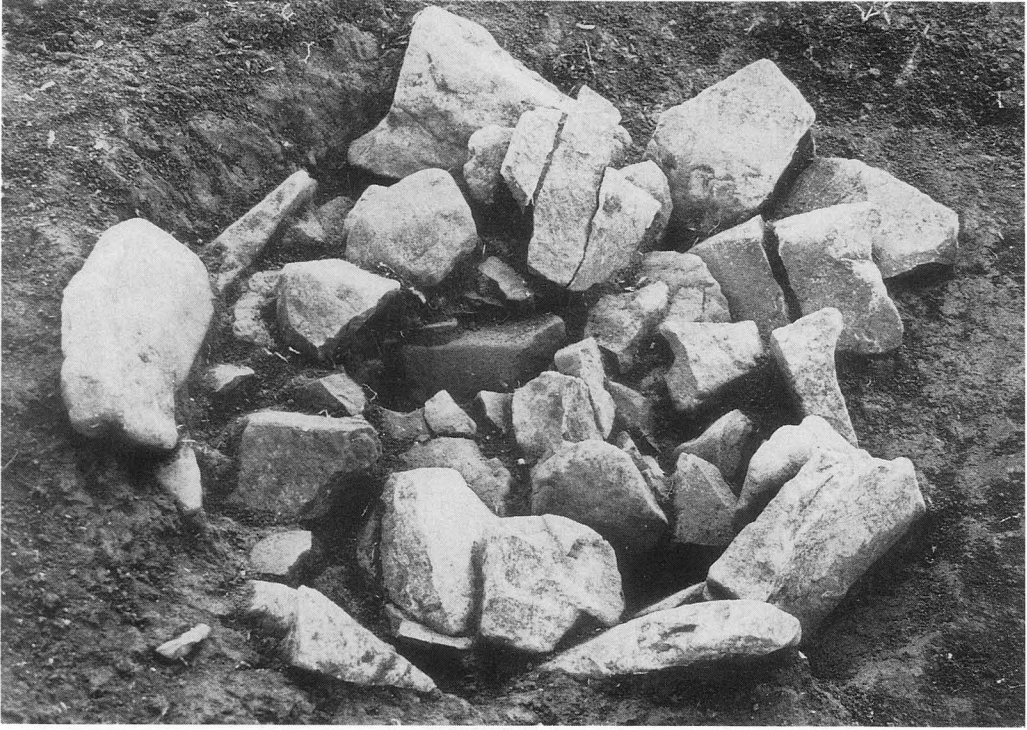
1号集石遺構



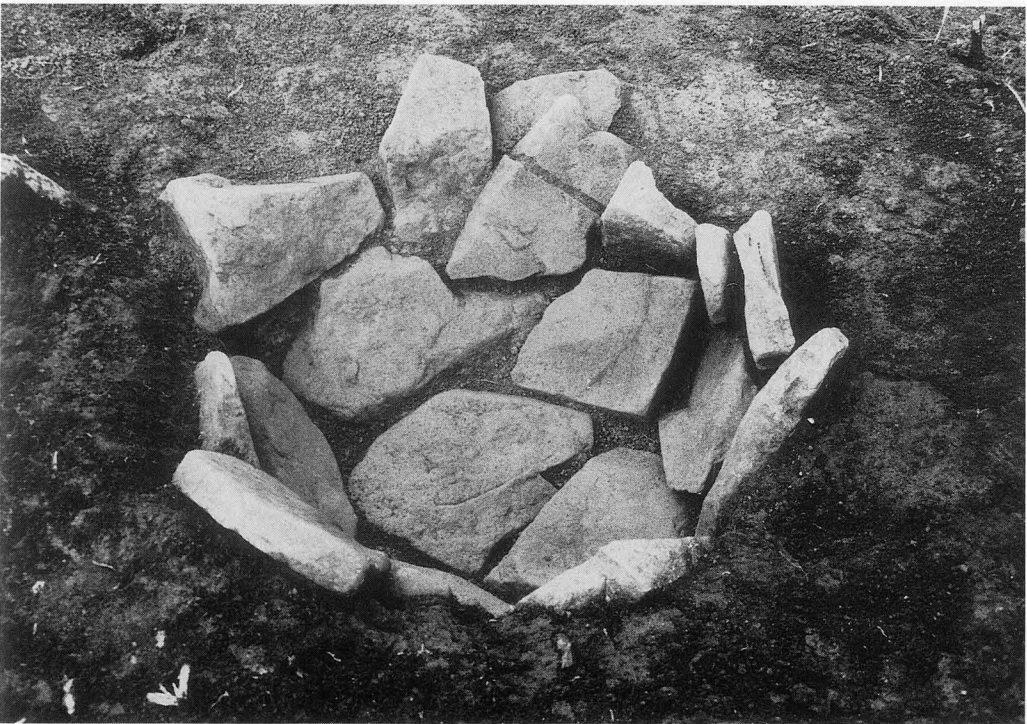
(野方式) 2号集石遺構



(野方式) 3号集石遺構



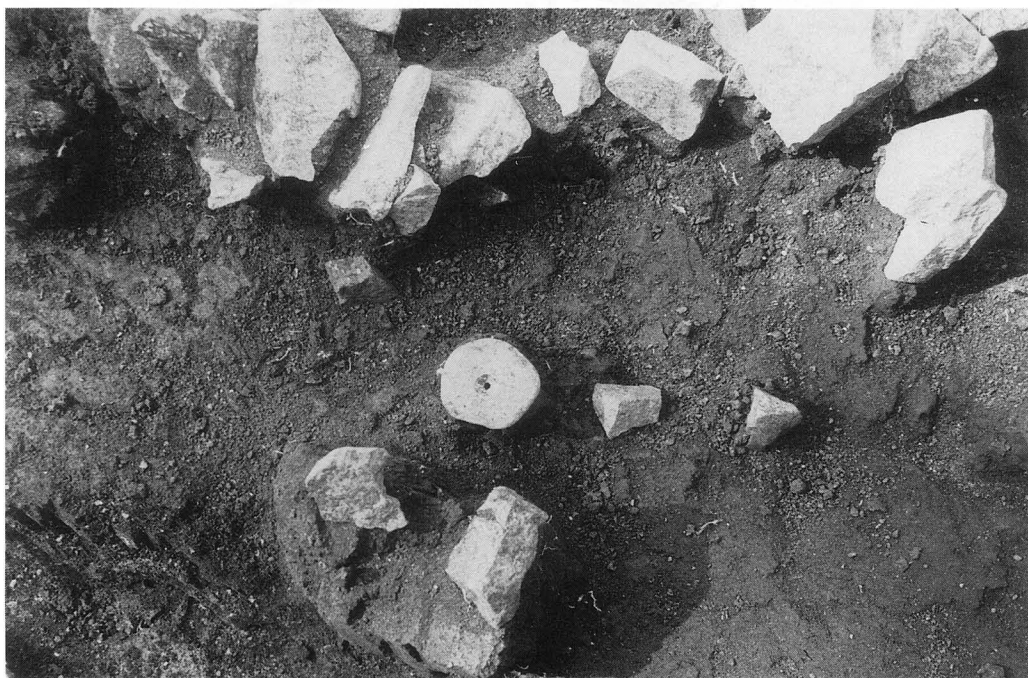
4号集石遺構（検出状況）



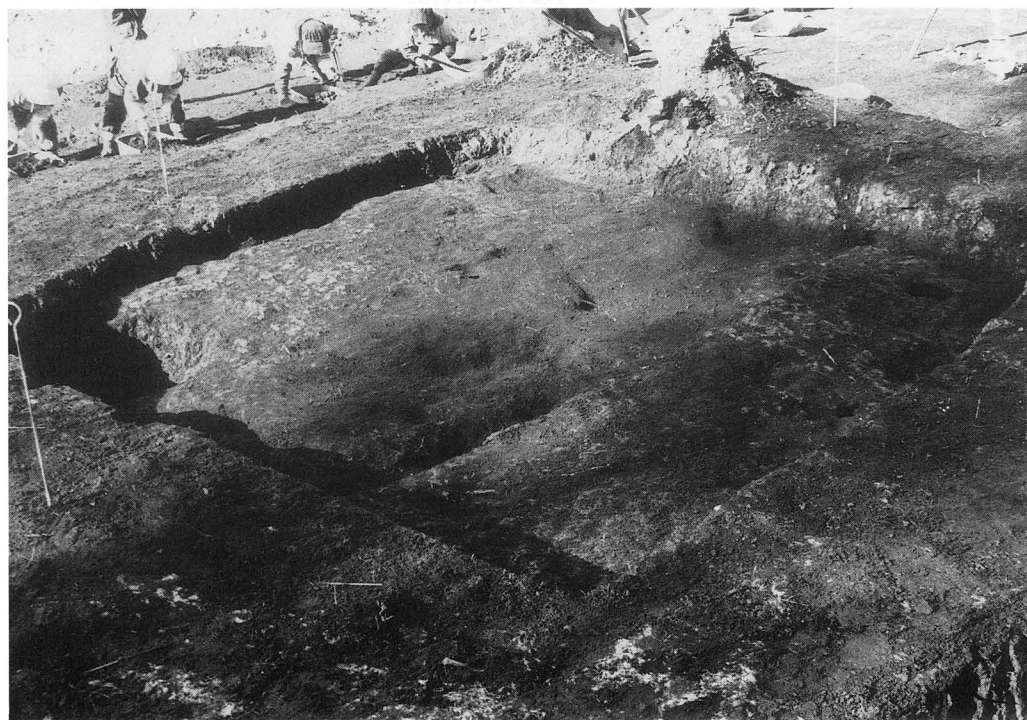
4号集石遺構（中の礫を除去した状態）



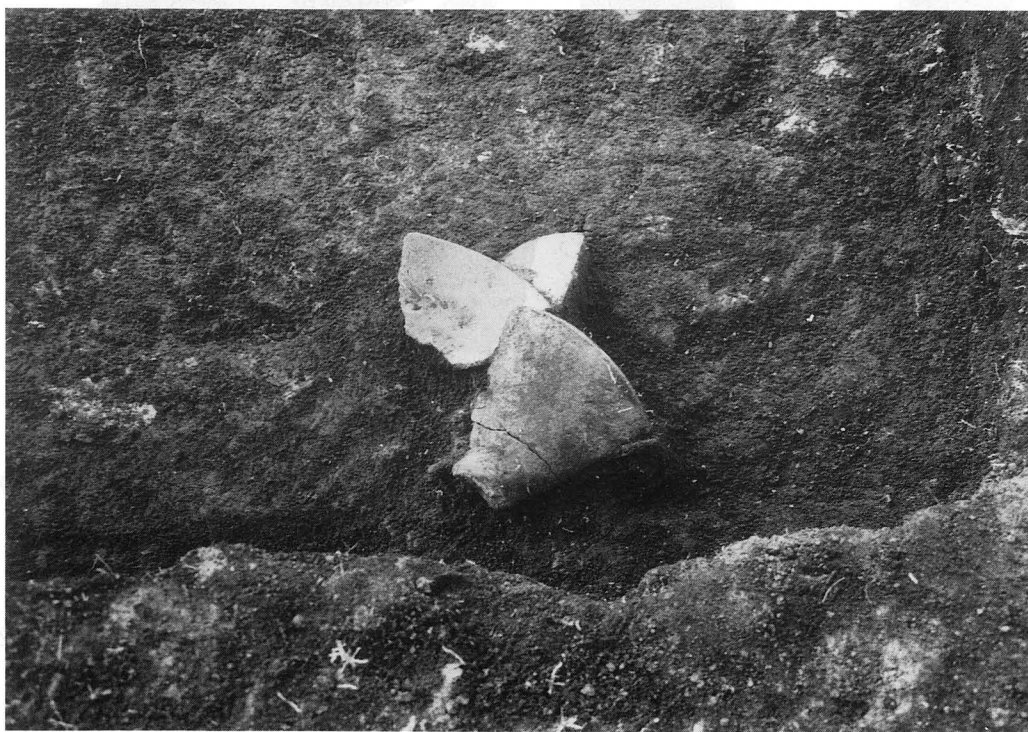
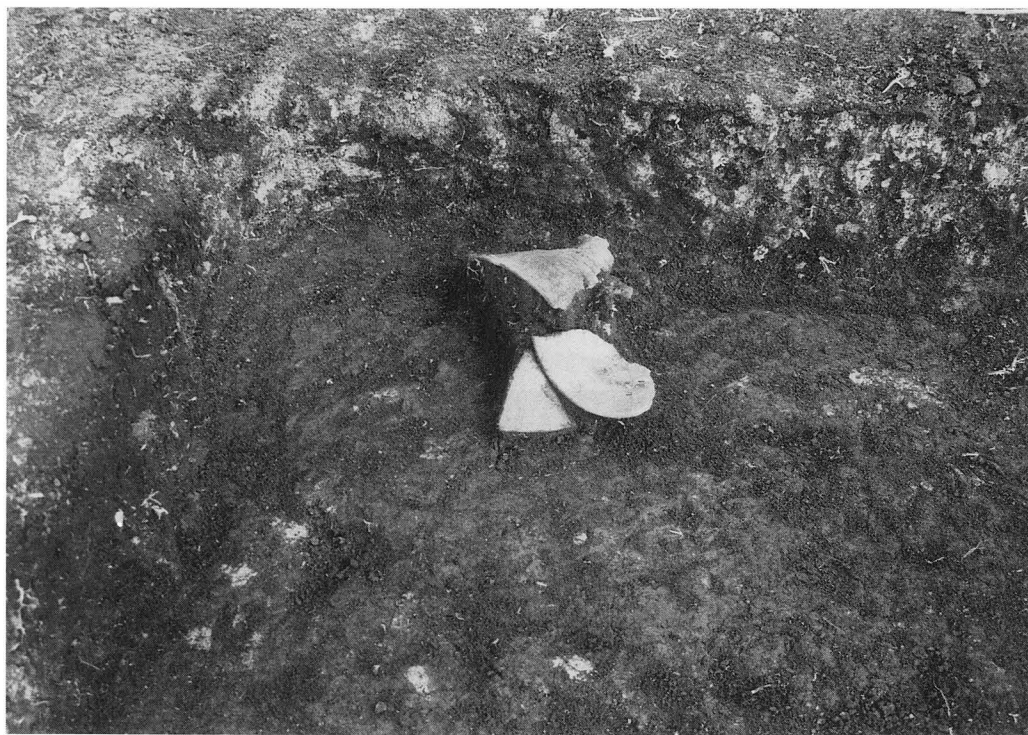
3号礫群検出状況



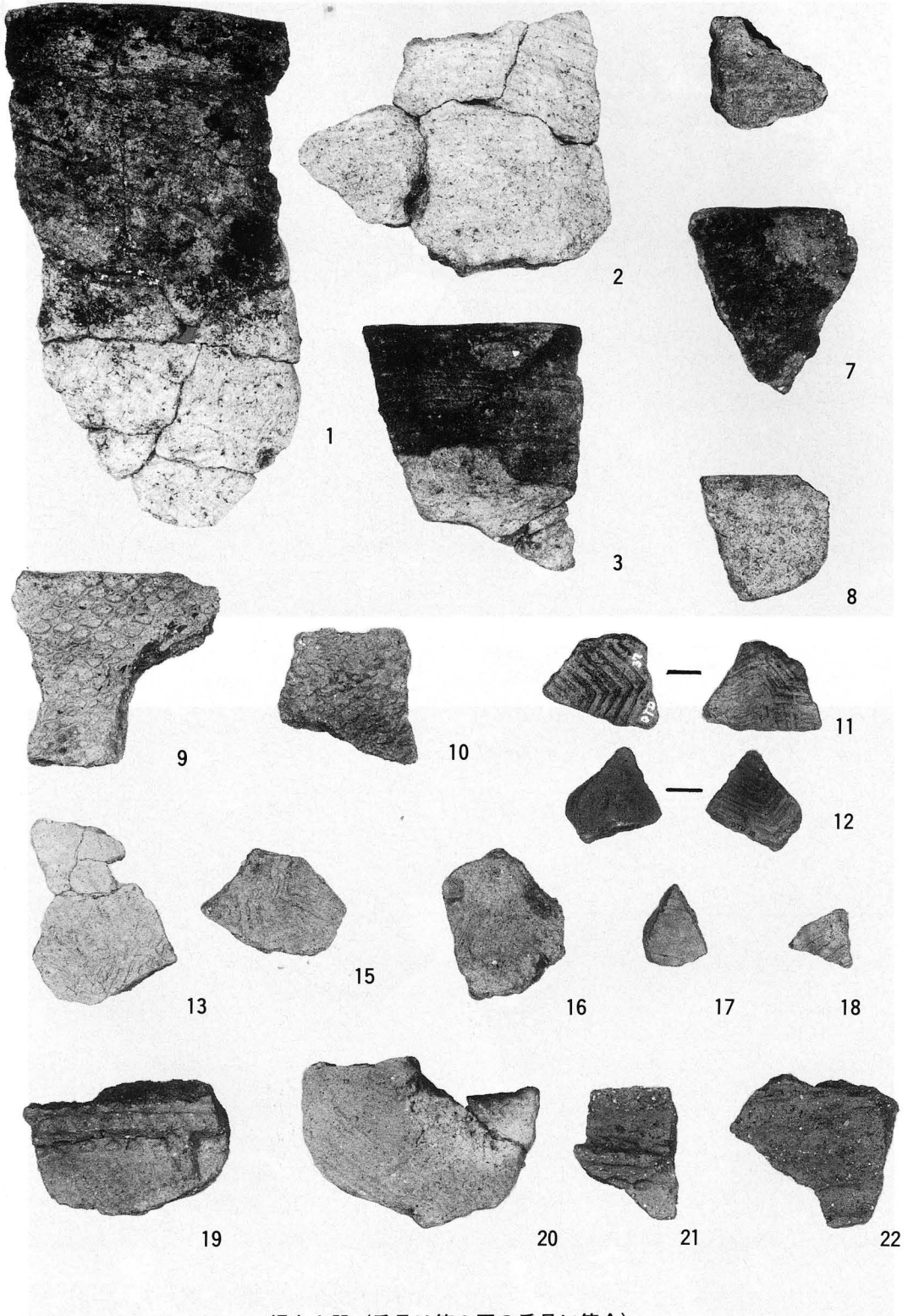
3号礫群内紡錘車様石器出土状態



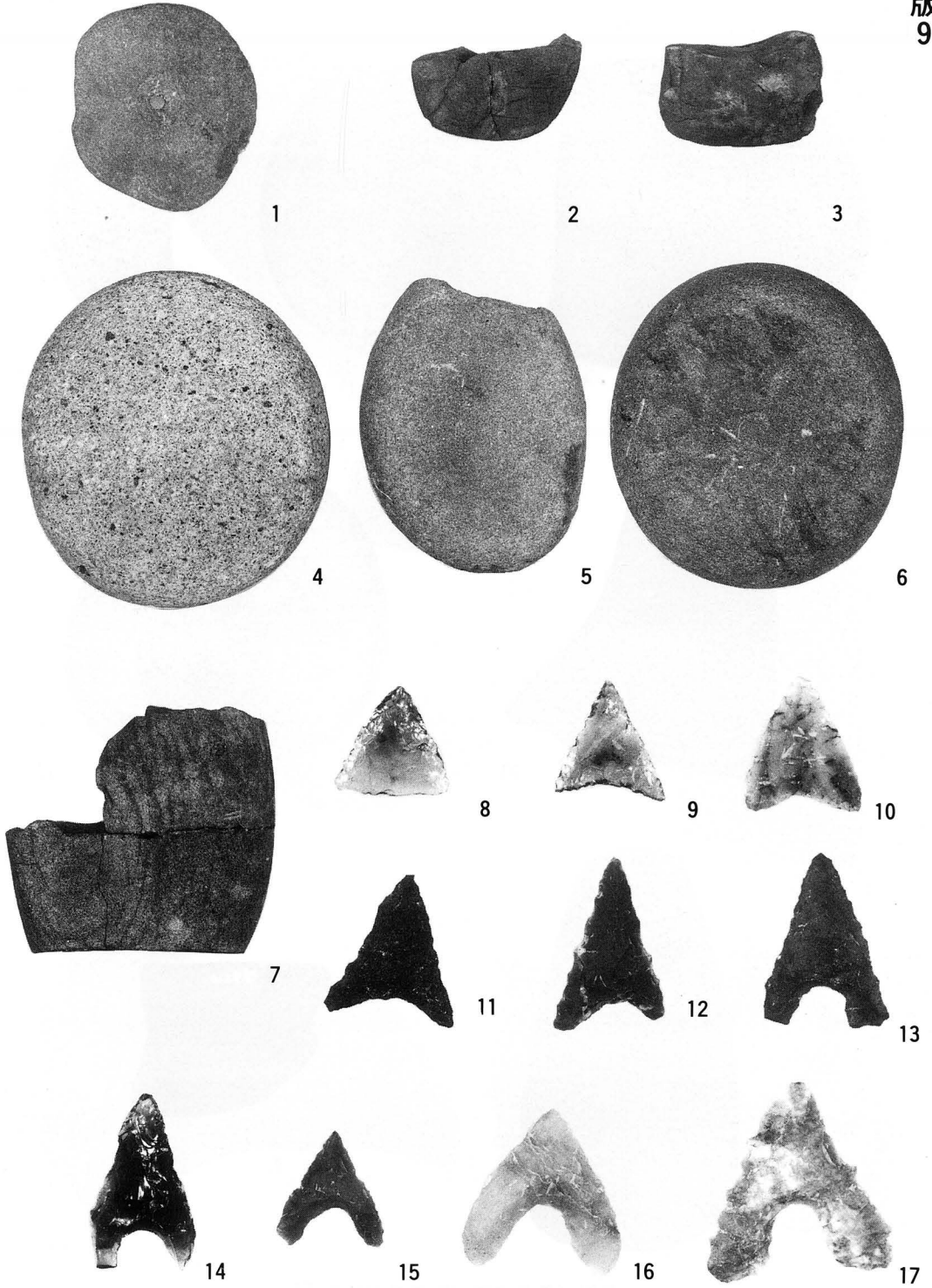
1号竖穴住居跡



1号竖穴住居跡内土器出土状況（鉢形土器）



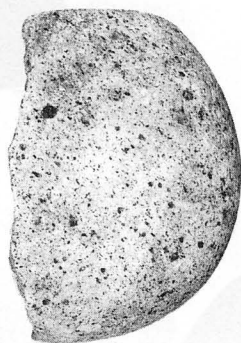
縄文土器 (番号は第9図の番号に符合)



石器（番号は第11図・第12図の番号に符合）



18



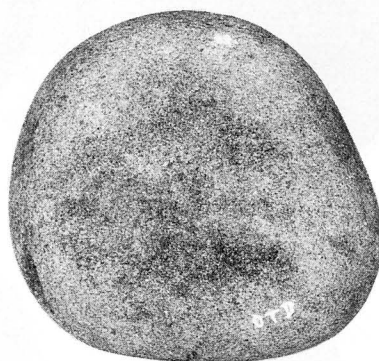
19



20



21



22

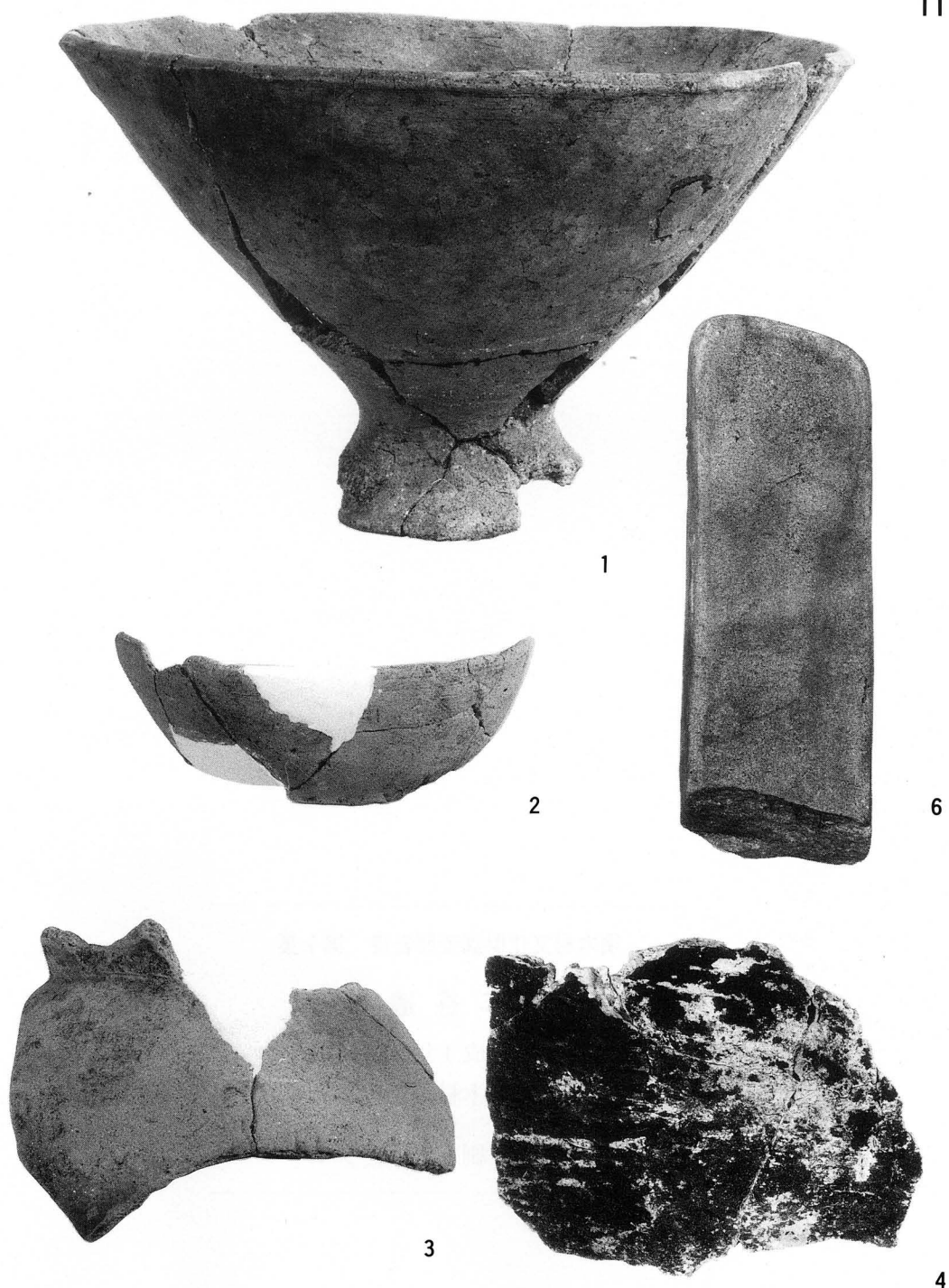


23



24

石器（番号は第13図の番号に符合）



1号竪穴住居跡出土遺物（番号は第15図に符合）

須木村文化財調査報告書 第1集

お お と し だ に
大 年 谷 遺 跡

発行日 平成4年3月31日

発 行 須木村教育委員会

印 刷 印刷センタークロダ
